

舞踊空間とエコロジー

ードイツ表現主義における舞踊

柴田隆子（専修大学）

20世紀初頭のドイツで流行した新しい舞踊は、自由舞踊（Freier Tanz）、新舞踊（Neuer Tanz）ドイツ舞踊（Deutscher Tanz）、表現主義舞踊（Expressionistischer Tanz）と様々に呼ばれ、ルドルフ・フォン・ラバンらは差別化を図るために表現舞踊（Ausdruckstanz）を提唱した。今日ではイサドラ・ダンカンに始まりラバンやマリー・ヴィグマンらに至る一連の舞踊の総称としてAusdruckstanzが用いられ「ドイツ表現主義舞踊」の訳語が付される。こうした舞踊が流行した背景にはドイツ表現主義の芸術運動があるのは確かだが、表現主義は明確なマニフェストを持った芸術運動でないため、全体像が掴みにくい。ダンカン、ラバン、ヴィグマンらについての研究はあるが、たくさんいたとされる舞踊家たちやそれを受容した観客についてはあまり言及されてこなかった。本発表では、新しい舞踊を希求し受容した観客に注目し、彼らに共有されていた空間理論と身体への関心から舞踊に何が期待されていたのかを考えてみたい。この時代は生物学者エルンスト・ヘッケルが提唱した有機体である身体と周囲条件の連関を問うエコロジーの概念が教育改革の分野で注目された時代でもあった。本研究では、今日議論されている舞台芸術におけるエコロジーの考え方が、ドイツ表現主義舞踊で既に試みられていたことを明らかにする。

第一次世界大戦を間に挟み、様々な芸術分野に現れたドイツ表現主義は、科学的世界観の変化の影響を強く受けている。19世紀後半には非ユークリッド的空間を論じたヘルマン・ヘルムホルツや、ニュートン力学に対し感覚による空間・時間があることを示したエルンスト・マッハら物理学者の知見が、一般に向けた講演などでドイツの知識人や市民に広まっていた。

哲学や美学への影響はよく知られている。マッハの「生理学的空間」を発展させた哲学者エルンスト・カッシーラーは、シンボル形式を通して主観的な知覚空間と幾何学的直観に現れる客観的な認識空間が相互に反映された感覚的に視覚化される空間を指摘する（Cassirer 1925:1969）。美術史家エルヴィン・パノフスキーはカッシーラーの空間概念を美学にあてはめ、このシンボル形式の生産に関わるのが、主観的視覚的印象の抽象化や対象化を実現する「パースペクティブ」であるとした（Panofsky 1924:1998）。このシンボルの格好の素材となったのが舞踊である。

哲学者フリードリヒ・ニーチェの著作にあった

舞踊や、あらゆる認識がパースペクティブに制限された解釈であるとの指摘が改めて注目されるようになる。ドイツ表現主義画家として知られるワシリー・カンディンスキーも『芸術における抽象的なもの』（1911）の中で未来の舞踊について言及しており、芸術と科学技術の融合を謳うバウハウスでは、同時代で言及されている44種類もの空間を例に挙げ、空間体験としての実践を考察している（Moholy-Nagy 1929）。新しい学問としてあった心理学や現象学にも言及し、ヘッケルやルードヴィヒ・クラークスのエコロジーの考え方も基礎教育科目「人間」の授業で取り入れている（Schlemmer 2003）。このバウハウスの舞台工房が探究するのは、有機的な人間と空間が生み出す舞踊であった。

舞踊や舞踊空間が注目される一方で、踊り手の主観が反映されると考えるパースペクティブの理論がある程度共有されていたにも関わらず、ラバンなど一部の例外を除き、当事者である舞踊家たちの多くは、理論家や批評家からは客体として見られ、彼らの言葉で語られる存在であった。舞踊家の多くが女性であったこともジェンダーの権力構造が働いたのかもしれない。マニフェストのない表現主義運動と呼応する形で、舞踊もまたこうした言説から逃れる形で身体を通じて伝播していった。ラバンやヴィグマンだけでなく、ゲルトルート・ボーデンヴィーザー、グレート・パルッカ、ベルテ・トリュンピらも自ら舞踊学校を経営し、そこに多くの女性を通い、舞踊が自己と周囲の環境との連関にあることを学んでいた。自己や仲間と向き合い、感情などの内面性を表出することから生み出されたものは、何だったのだろうか。舞台芸術のエコロジー研究でしばしば引用されるサラ・アーメドの『情動の文化ポリティクス』（2004）によれば、感情は関係性であり、空間創造や観客とのコミュニケーションに大に関わるものである。単なる共感とは異なる学び合いの中で、批評家の目線とは異なる文脈で舞踊が受容されたであろうことは想像に難くない。

20世紀初頭に流布していた空間論は多様にあり、様々な身体観を反映させて舞踊を解釈する知識人の観客がいる一方で、自己実現のために自己の内面とのみ向かい合うとされた舞踊家たちの多くは、これまで観客としても舞踊の担い手としても見えない存在となっていた。同時代の科学的な知見は、舞踊家である彼女らにも共有されていたはずである。異なる背景を持つ人間が集い、舞踊を通してのコミュニケーションで生み出される時空間がドイツ表現主義舞踊にはあったのではないか。そしてこうしたコミュニケーションとして舞踊を捉えることが、今日の舞台芸術における「エコロジー」の視点につながると考える。